

創立100周年記念講演

新しい世紀へ創造と愛を

聖路加看護学園理事長
聖路加国際病院理事長 日野原 重 明

聖路加国際病院・看護大学は、アメリカの聖公会によって建てられた病院・大学である。柳城も姉妹校のようなもので、カナダ聖公会の宣教師によって建てられた。柳城は聖路加より、4年早く1898年に創設されたが、親しみを感じて、今日ここにうかがった。3年前名古屋で医学会総会があった時、新幹線をおりて国際会議場へ行くためタクシーにのった時、私のことについてタクシーの運転手さんがたずねたので、聖路加国際病院の院長（当時）であると言ったら、急に運転手さんは車をとめ、後をみてサリンの病院の先生ですかといって挨拶をうけた。サリンのことは世界に知れわたり、カリフォルニアにいる孫が、小学校でテレビのニュースを見ていたら、私の姿が映って、得意になったとあとで聞いた。サリン事件のさい、聖路加国際病院は520床の病院でありながら、640人の患者を収容したとして注目された。病院は6年前に新築されたものであるが、設計プランは15年前にできていた。病院には、関東大震災のような震災に備えて、廊下、礼拝堂、ラウンジ等の壁には酸素吸入の設備がうめこまれている。それがサリン事件のさい、威力を發揮したのである。640人の患者を収容し、治療にあたり、残念ながら一人だけ亡くなった。サリンの治療にあたる時、その治療法のマニュアルがなかったので、私は若い研究心の旺盛な数人の医師に諸情報から治療法を作ってもらい、120人の医師、50人の研修医のすべてが治療できるようなマニュアルどおりに処置にあたった。このような病院の設備をつくるには、20年前に訪ねたスウェーデンやスイスでは、災害に備えて地下に手術室や発電施設などを整備していることから学んだのである。

さて、聖路加国際病院は、1900年にアメリカのバージニア州から、26歳の医師R. B. トイスラー〔26歳から61歳まで在日した〕が、アメリカ聖公会の宣教師として来日され、1902年に小さな診療所を作ったのが始まりである。それから96年たった。東京帝国大学医学部には、ドイツからベルツ教授〔Edwin Von Baelz, 1849-1913〕、スクリーバ教授〔J. Scriba, 1848-1905〕などが来て近代医学をスタートさせたが、施設はあっても、看護はまるでなかった。トイスラー医師は、まず良い看護を提供できるような病院をつくること

をめざした。トイスラー先生がよい看護を日本に実現させようという意図で、私たちの病院はスタートした。これが後に看護大学となった。その伝統を受け継いで、看護婦の博士コースを一番早くつくったのは私たちの大学である。聖路加の姉妹校にもあたる柳城は、保育者の養成の仕事をつづけ、今年になってから老人のふえる21世紀に対応して介護福祉士のコースを設けられたのは意味が深い。

今、日本には病院、大学、老人ホームはあるが、そこに住む地域の人々の関心は案外低いのではないか。それらを利用することはあってもそれを積極的に支援しようとする地域・コミュニティがない。教会があって牧師と信徒がいても、地域がなく、コミュニティがない。この点が外国とちがう点である。古い伝統をもつ神社には氏子がおり地域があったが、だんだんと形式主義的になり、今はご利益的な意味での利用におわっており、もりあげてよいものをフィードバックしていない。日本には各種の宗教があるが、コミュニティはない。学校もそうである。

ホスピスは、1967年に、シシリー・ソングラス医師によってロンドンの郊外につくられたのが最初である。これは治療法がもはや考えられない末期のガン患者のための施設で、痛みによる苦しみを取り去り、死の不安がなく、天命を終えられるようにするためにつくられた。外国とくに英国系のホスピスは、入るのにお金はいらない。政府は半分位の援助をするが、大半の費用は地域の人々がサポートしている。10~20人といった小規模のホスピスが多いが、地域の人々がボランティアとして集まり、ギフト・ショップ等を経営して、その売上げが運営のために用いられている。地域の人々は、自分の地域にホスピスがあることを誇りにしている。同じように地域にカレッジがあることを誇りにしている。

日本では、地域に学校や病院はあるが、地域の人々が自分たちの誇りとして応援しているだろうか。PTAの活動はあるが、子どもが通学している間だけのことで、子どもが行かなくなると、協力をしない。日本ではどういうメリットがあるかを考えないと、あとまで続く行動がでてこない。真の援助はしない。

以前、WHOのマラー事務局長にあった時言われたことは、日本からの寄附があるのはよいが、もうかったら援助するという傾向が強く、お金を出しはするが、人材を派遣するというような援助はしないと。これに対してミッション系の学校や教会の創設者は、現地で実際の働きをするという形で奉仕される。トイスラー医師の場合も永く日本にいて奉仕した。

アルベルト・シュヴァイツァー〔1875-1965〕は、ドイツの神学の大学教授であり、優れたパイプオルガンの演奏家であったが、36歳の時医師になり、38歳でアフリカにわたり、赤道直下のコンゴ地方で現地人の治療にあたり、90歳で亡くなる迄、この世的利益に走らず、奉仕の生活をした。日本に来た宣教師の働きは皆長期にわたっている。柳城の創設者

マーガレット・ヤング先生も、27年間の長きにわたって奉仕された。そのあとに続いた人も10年あるいは40年以上も働かれた。聖路加は、当初アメリカの聖公会からの献金で支えられた。建造物としても歴史的に有名なチャペルはそのまま残してあるが、昭和8年にコールという婦人の方が全財産を遺言で残したものが、チャペルの費用になった。

これらの人々にみられるようにやる事が徹底している。日本は金はさすが、人が伴わない傾向がある。次の世紀には、このままでは日本は小さな国の1つになってしまう。自分の仕事や働きに全力を投入しているかが重要である。私は運動が好きなので、おととい夜おそくまでW杯のイギリスとイタリアとのサッカーの試合をみたが、このサッカーの選手も大変な訓練に励んできたのである。チャイコフスキー国際コンクール音楽部門で1位となったソプラノの小山美枝子さんにしても、4歳位からずっと、1日何時間も生涯をとおして練習している。あのようなスポーツ選手やアーティストが全身全霊をささげていることに注目したい。医師、あるいは他の専門職の人はこのような努力をしているかどうか。日本の医師や看護婦は忙しいといっているが、アメリカの研修医は日本の研修医に比べて3倍くらい忙しい。看護婦さんの場合もそうである。

プロフェッションとは、神から召されたもの、神からの召命を告白し、プロとして生涯をおわるのだから、生涯を通しての学習をしなくてはならない。

日本では大学に入ると、それで目的を達したとばかりに五月病になり、アルバイトでかせいで外国旅行をする。きれいな自動車に女の子を乗せることで、若い日が過ぎてしまっている。それに比べるとアメリカの医者や研修医の車はオンボロである。

アメリカでは、医学生の場合、4年の大学を卒業後また4年かかるが、あとの4年は、いくら金持ちの子でも独立してやっており、親からお金を出してもらっていない。

私は1か月前、約2週間ほどアメリカやカナダにいったが、状況を見ると切磋琢磨する態度が大学生でも日本とはちがう。私の孫がマサチューセッツのカレッジにいるが、たくさんの本を読むのに忙しく、夏休みでも外国旅行などする余裕はないが、学問をすることのたのしみがあるから全然負担ではないと語っていた。そういうように教育が徹底しているのと比べると、新しい世紀に日本の将来はくらい。

日本の銀行や会社の中には整理されているものがあるが、日本人の生活行動がこのまま続くかぎり、よくはならない。問題があっても行動が伴わない。政党も理屈どおりに行動していない。新しい世紀は輝かしい世紀であると考えているかもしれないが、このままでは新しい世紀には、日本は没落の途をたどることになる。日本人の生活行動では、新しい世紀はきりひらけない。生きることを本源にもどって考えないと、日本は存続しえない。医学においては今のような研究体制では、ノーベル賞をとるものはでてこない。1901年にノーベル賞の医学生理学賞が設けられたが、日本の医科大学を出た人からいまだに受賞者

が出ていない。日本の研究が二番せんじ三番せんじであって、創造的ではないからであり、よい環境がないからである。人間の左脳は論理的働きをし、右脳は美的なものをつくる働きをするのであるが、日本についてはよい遺伝子はあるが、よい畑がないため、種は発芽しない。新約聖書には「一粒の麦地におちて死なずば、唯一つにてあらん。もし死なば多くの果を結ぶべし。」(ヨハネによる福音書12:24)、「種は、良い土地に落ちたら実を結び100倍、60倍、30倍にもなる」(マタイによる福音書13:8)とあるように、種を育むよい土壌がつくられなければならない。人の命を育てるにはよい畑が必要である。種をどこに植えるのか、子どもをいかに育てるかが問題なのである。

日本は現在、子どもを育てるのに不可欠な家庭の愛がなくなっているのではないか。子どもはコンピュータゲームに熱中したり、年頃になるとデートしてドライブすることがよいと考える。又、家庭よりも塾や学校に依存しすぎている。

聖路加は、明治時代築地で発足したが、築地には立教大学が開学し、女子学院、明治学院が誕生した。明治時代築地は文化の中心であり、いくつものミッションスクールができた。そしてそれが、名古屋、広島、長崎など全国へと拡がり、ミッションスクールの働きは大きかった。

これからは、ビジョンをもち、考える人間であるとともに、行動する人間にならないかぎり、21世紀は私たちのものにはならない。医学の場合もそうである。私が理事長をしているライフ・プランニング・センターで援助した学生が、ハーバード大学に留学し、さらに自力で学習を続け、若くして正教授となり、世界的な研究をしている。日本にいたらせいぜい助手か講師になっているくらいの年齢だと思われるが、アメリカには実力があさえすれば年齢など関係しないのである。かれが伸びたのは畑がよかったからである。荒地におちた種は育たない。かれのようなタレントを伸ばすところが日本にはない。

残念ながら日本では、学生は大学に入ることが目的で、入ってしまうと勉強をしない傾向がある。授業に出席しないでも試験に合格しているという話をきくが、しっかり勉強した方がよい。システムのない学校では人は育たない。

新しい世紀では、地球の汚染を防がねばならない。地球はこれまで人々が住んできたし、これから生まれてくる人々のためのものでもある。現在地球に住んでいる私たちは、地球を汚染から守る責任がある。21世紀の環境は、外的環境と内的環境の二面から考える必要がある。外的環境では、空気の汚染を防ぎ、緑を育て、海や森を守り、生物を大事にすることが重要である。シュヴァイツァーは人間の命はもとより、昆虫の命までも大切にしたことによく知られている。昆虫でもすばらしい遺伝子をもっている。それをこわすのは越権である。私たちはこのような環境の保護にもっと努めなければならない。

内的環境は心の問題である。子どもをいかに育てるか、老人をいかにケアするか。それ

それぞれの心の環境をどうするかが問題である。その中で、どうすればクリエイティブなことができるか、よい結果をうみだせるか、命を大切にしていくには、内なるものがいかに洗練されたものになるか、幼児教育がどういうものでなくてはならないかを考える必要がある。老人は増え、21世紀には65歳以上の人々が全人口の4分の1を占めるようになり、そのまた半分は75歳以上で、介護をうけなければならないようになる時に、介護の問題をいかに考えるか、老人が身体はいたんでもよく生きるとは何かを考えなくてはならない。そうしないと、21世紀の人々の幸福は与えられないと考える。時々私は外国に行くが、自分を反省し、日本を外からみる機会を与えられる。日本ほどエゴイスティックな国はないのではないかと思うことを経験した。日本では、聖路加でも院長や理事長がエレベーターに乗っていると、職員の中にはまともにみるのをさけている。会った時にどうしてにこっとしないのか、お早ようといった挨拶ができないのか。エレベーターを下りる時に、「お先に」といった挨拶ができないのかと思う。エレベーターに乗る場合も、あとから乗ろうとする人のことを考えずに、頭ごしに手を伸ばしてすぐしめてしまう。このようなことは日本だけである。すこし待って乗るように配慮ができない。外国人のマナーを学んでほしいと思う。

日本は今や世界でも一番の長寿国であるが、苦しんで寝たきりになっている老人が多い。英国のドクター・プライは、日本の実態をみて、日本の長寿は決して祝福されてはいないと言った。ねたきりになっている人の数は100万人になろうとしている。日本にはものには金をだすが、人には金をださないところに、福祉行政がよくなる原因がある。日本では看護もよくないのは、その数がすくないからである。看護婦の数は、アメリカの2分の1か3分の1である。看護婦の仕事の処理なども、アメリカに比べてスローである。アメリカの病院も合理化の動きはあるが、介護する人の数は、日本よりも多い。イギリスでは問題のある人には、ヘルパーが1日4回家庭を訪問して介護をしている。日本ではせいぜい1週に2回か3回にとどまっている。イギリスでは医療や介護について、国民が税金を出すことを納得している。日本では税金をすくなくしないと票をもらえない。票を獲得するためには消費税を3%に下げることがを主張している政党がある。スウェーデンでは消費税は27%、医療や介護や教育のためにお金があることは当然と考えている。日本では出すのはいやだが、もらうのはよろこんでもらうという状態で、このままでは21世紀の日本はどうしようもない国になる。

幼い子どもやハンディキャップのある子どもへの配慮が日本はよくない。アメリカにいくと、ハンディキャップの人は、国内旅行する場合、日本よりはるかに楽である。どこにでもエレベーターはあるし、車いすはあり、電気自動車はある。日本ではプラットホーム迄行くのに容易ではないので、ハンディキャップのある人は旅行をしなくなる。日本でリ

ハビリテーションの学会があったときこまったのは、トイレが障害者用のものがすくなかったことである。ハンディキャップに対する配慮が日本では足りない。スポーツやオリンピックのようなものには金を出す、教育のためとか老人のための予算は限られている。この発想を21世紀には変えないとどうしようもなくなる。フィラデルフィアでは、166年前に視力障害のある人のための学校教育が始まったが、現在では子ども1人につき、1.2人の教職員がついている。目がみえない人にも大きなコンピュータの画像でコンピュータを操作できるようにしている。日本からも代表者が1年の訓練を受けにいったが、その人が帰国した時、日本では使ってくれるところがない。その点の配慮が行政にも地域の人にもない。

日本では医療、看護、介護を分けて考える傾向がある。昭和38年に老人福祉法ができて、特別養護老人ホームができた時に、その施設を利用している高齢者の世話をすることを介護というようになった。アメリカでは、elderly careとっているが、health careとnursery careというように、いずれもcareという語が使われている。これらは重なりあうものであるが、日本では区別する傾向がつよい。介護は日本で狭く定義しているので、融通がきかない。アメリカでは老人のcareには医療、看護、介護を含んでいる。広いケアという傘があって、その下で分業がなされている。日本ではセクショナリズムの傾向がつよい。これからの時代は医療でも看護と介護とは重なりあうものである。すぐれた介護士は、看護もやり医療もやるようにならなければならない。介護士はせまい勉強でなく、看護も医療も、カウンセリング、ソーシャルワーカーの仕事も勉強するというように、広い幅をもたないと成長しない。日本では介護と看護とを区別し、介護の人が看護すると越権行為だとされるが、21世紀では改められなければならない。アメリカでは、看護婦は、眼底検査も前立腺の検査もやる。やれないのは死亡診断書を書くことだけである。医師と組んでモルヒネも処方できる。薬物を扱うことは、careをする人の常識となっている。融通をつけてやっているのが、外国のシステムであるが、日本ではたてわりになっているので、これでは21世紀のhealth careは進歩しない。21世紀のhealth careは、大きなケアという傘の下でいかに協業していくかが大切なのである。

また家庭教育の重要性を認識しなければならない。慶応義塾大学をつくった福澤諭吉先生は明治10年に、『教育論』という本の中で、学校は教えるところ、本当の学びは家であるものと述べている。家での学びの先生は両親であるから、両親がどのような生活をしているかによって、子どもはそれを学ぶのである。だから両親はしっかりしないといけない。フランスの教育学者J. J. ルソーは、『エミール』という本の中で、大人の文化が子どもをだめにする、とくに子どもをぜいたくにするのだめになると警告した。今の日本がそうである。私たちの子どもの時は、お正月が近くなると、お年玉を夢みて興奮して

寝られないようなことがあった。5円玉とか10円とかもらうことがとてもうれしかった。今はこのような興奮がない。日本では物が豊かになりすぎて、子どもの環境はわるくなっている。南半球では何万人の子どもが飢えて死んでいる。ありあまった物の中で、日本の子どもは育っている。子どもがおたがいに物をわけ合ったりするような環境であってこそ、相手を思いやるような心が育まれる。学校の教育をよくするために、教師は家庭に協力をお願いしなくてはならない。

少子化になり、老人は増えていくことで、これからどうなるかを考えてみたい。

高齢者の健康度の分布をみると、20年後には25%の人が65歳以上になってくるが、そのうち援護を必要とするのは4分の1、健康に恵まれた人も4分の1、あとの半分はふつうの老人である。しかし25%のうちの5%、つまり5分の1は施設に入らなければならない。21世紀には65歳は老人としてはならない。医学や予防医学の発達で健康を保つことができるからである。気をつければ、60歳になって糖尿病になるのはやむをえないが、30歳、40歳で糖尿病になるのはよくない。65歳になって心筋梗塞になるのはどうしようもないが、25歳で心筋梗塞になってはならない。生活をコントロールし、衣食住をコントロールし、食塩をすくなくし、糖質を制限し、肥満にならないようにし、運動をし、たばこをすわない、お酒は多くて2合にとどめるように生活を節制していれば、65歳ではまだまだ大丈夫でとても老人などとはいっておれない。75歳以上が老人だということにしないと、つまり75歳まで生産的な仕事をしてもらわないと、子どもがすくなくなっているから国の生産力はおちてくる。そういう意味からも75歳以上を老人としなければならない。そのためにも若い世代の人が習慣病にならないように自分で注意する必要がある。20年前に私は成人病を習慣病と呼ぶように提唱したが、近年になってやっと厚生省にとりあげられるようになった。国にお金がなくなってきたから、あなたの健康は自分で守りなさいというようになった。75歳まで働けるように健康に注意することは国のためにも必要なことである。これから老人がふえ、子どもが減る。2050年になると、人口が減る。もっと生き生きとして生産的な人生を長くつづけるには、若い時から老いの準備をしなければならないということの特に言っておきたい。

これからとくに大切なことを申し上げたい。どうすれば次の世紀を積極的な明るい希望をもって迎えることができるかということである。人間には希望がないといけない。私という存在が他者に希望を与えることができることが大切である。たとえターミナルの患者さんにも希望を与えることが必要である。ホスピスの患者さんで、27歳の若さで、ガンの末期のため4週間食べられなくなっている人がいた。彼女は葬式のプログラムをたてた。私は2週間前に訪ねたとき、また近いうちに来ますよと告げた。その人は私の来るのをまつことが心の支えとしている以上、私は忙しくても行かなくてはならない。私が訪問する

というメッセージが、彼女にとっては生きるための意味であった。その人は数日間生き延びることができ、安らかな死を迎えた。自分の存在に意味があると思うとき、その意味のために生きがいを感じるようになる。介護士や幼児教育の場合も、何らかの生きがいをもつことで、つらいことにも耐えることができる。21世紀を自分が支えていくという、自分の仕事の意味を感じることが大切である。

ヴィクトル・フランクル〔Viktor Emil Frankl, 1905-1997〕という、オーストリアの精神科医がいる。ユダヤ人であったため、ナチスによってアウシュヴィッツに拘束された。そこでは何百万という人が殺された。使役ができる人だけが生かされる。二列に並らばされ、役に立つ人は左の使役の列へ、役に立たない人は右の死の列へとふり分けられた。フランクルは死んでたまるかと思い、ぐっと頑張っ使役ができることを示して左の列へ加わった。ナチスは150万もの人をこのキャンプで虐殺した。かれはどうすればキャンプの中で生き残れるか、歴史にキャンプの実態を残さなければならないという使命感と、逆境の中にあっても強い意志力があれば命を保つことができる不思議な力が湧くのだということを実証したいと頑張っ、何とか生き延びることができた。強制収容所での経験を『夜と霧』という本に書き、この本は800万部も売れるベストセラーとなった。ナチスがどのように人を殺した実態がはっきり書かれている。かれは昨年9月2日に亡くなった。〔8月31日に〕ダイアナ元皇太子妃が亡くなり、〔9月5日に〕マザーテレサが亡くなり、かれの死はその間の日であったので、人々の注意をひかなかったかもしれない。私は朝日新聞にフランクルの追悼の記事を書いた。

かれは、人間が生きるには、次の3つの価値が大切であることを述べている。

- (1) 愛すること愛される存在であるという自覚が逆境に耐える力を与える。
- (2) 創造する力があること。creativeなものを考えだす力があること。これらにより苦しい中にも生きることを可能にする。伝道するとか、発明するとか、作品をつくるとか、創造することがパワーをかき立てるのである。人間のみが創造する恩寵が与えられる。苦しい中にも生きる力、創造する力を大切にしなければならない。
- (3) 耐えることは意味があるという価値観。フランクルは耐え抜いて生きていくことの大切さを自ら実証した。『それでも人生にイエスと言う』という本の中で、あれだけの苦難を体験してさえも、いかに生きることは意味があることかと、人生を肯定している。

30歳をすぎてらいを治療する医師になろうとした神谷美恵子さんも、耐える時に人生の意味があると述べている。その経験によって、感性は磨かれ、苦しい人に同情できるし、つらい人の友となることができる、苦しいことが理解できるし、その人に何とかしてあげたいということがわかってくと。私たちもそのような感性をもち、人への愛を純粹に感ずることがなければならない。

ところが現代は左脳中心にものを考える傾向が強い。ものごとを科学的に処理するような知力をもったものをインテリゲンチアと考えている。あたたかい感性をもった人間を科学主義がだんだん抹殺してくる。医学でも知識と技術だけが尊重され、医学では手の施しようがないような状態になっているのに、最後まで無駄な治療と検査をやる。そして患者は苦しんで死んでいく。そうではなしに、いよいよ死が迫った時には、どうしてそのそばにいて心を支えるかというような教育がなされなければならない。物理や数学ができると、とかく医学部へと進学してくるが、もっと感性のある人が医者や看護婦にならないと、臨床医学は伸びない。ペスタロッチ〔Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827〕が言った3つのH、すなわちHead. Heart. Hand (Technology) の中でも、人間として生きていくには特にHeartが大切であると私は強調したい。

Heartが20世紀では蹂りんされてきた。20世紀というのは、前半から中葉にかけては第一次大戦があり、第二次大戦があるというように、戦争の歴史であった。後半になっても冷戦があり、内戦が続いてきた。

1961年にアメリカは月飛行のアポロ計画をたて、1968年に月着陸を実現した。1965年には心臓移植ができた。外国ではどこでも心臓移植はあたりまえとなってきた。しかし、私たちには、知識とテクノロジーをどのように患者に、特に死にいく患者に適用するかというわざの追求においてはまだ究められてはいないのである。芸術家のパフォーマンスのように、知識と技術をどのように医療の場面に用いるか。たとえ回復の不可能な患者にも、病名をガンですよといって望みを絶つことではなしに、どのように心を支えて、やんわりと自覚させるようにするにはどうしたらよいか。そうするには医師だけではなく、看護婦、ソーシャルワーカー、牧師や僧侶の働きをかりて、spiritual careをしなければならない。そうすることにより、患者は自分の最後を知って、自分のこれまでの人生を意義づけ、この世を去る時の最後のことばを残せるようにする。そうできるようにするには、科学ではなく、Heartこそが必要とされる。それには感性により相手を理解すること、患者を愛することである。死んでいく人が愛をもって死んでいく、その時にはこれでよいのだという肯定的な気持ちで去っていく。私がつくった22床のホスピスは6年を迎えた。別居していた夫婦が、妻はホスピスで死にたいと思い、夫にだまってホスピスに入った。ところが主人が誰かからそのことを聞いて、勝手なことをするなといって、電話で奥さんと主人は争った。しかしいよいよ奥さんの具合が悪くなったので、私はご主人に大きないきちがいがあったかもわからないが、最後を見送って下さいと言った。はじめ来た時は、「もうかえって下さい」「もう来ないよ」というような断絶があった。しかしいよいよ悪くなり、電話でもう明日あたり亡くなるかもしれないと言ったら、ご主人は来た。そしたら死ぬ1日前に赦しが二人の心の中に生じ、奥さんは主人を赦し、奥さんも赦された。生涯の最後に救い

がおこった。生涯を1000とすると、そのうち999が幸福でも、最後の一つが悪ければ全体が空しさで覆われる。シェークスピアの劇で「終わりよければすべてよし」という戯曲があるが、これまでの999は苦難のつらい生涯であったけれども、最後の一つが輝いたものであるということを経験することができれば、たとえその人が死んでも、その人の死は勝利の死であると言える。

私はホスピスで亡くなる多くの人をみて本当に教えられる。教科書には書かれていないことばかりである。患者さんこそは私たちの先生である。それらの患者さんや家族のために、私たちは何をすべきかを考える時、愛という気持ちがないかぎり、私たちはどんなにすばらしい頭脳やテクノロジーをもっている、その人を救うことはできないと思う。病気はなおらなくても、魂のいやしがある。魂のいやしは宗教における一番の望みである。科学だけですべては解決できない。我々の心の中の宗教心を大切にすることが21世紀には必要である。トインビー〔Arnold Joseph Toynbee, 1889-1975〕という有名な文明批評家は、21世紀には宗教がまた復活するのではないかと語っている。戦争があり、科学主義のゆきづまりを体験したのだから、これからは人間は謙虚になって、偉大な宇宙の創造力に身をゆだねていくことが必要である。いくら科学は進歩しても、遺伝子をつくることはできない。一つのせみにも昆虫の一つにも、花でも植物でも果物でもすばらしい遺伝子をもっている。このような宇宙の大きな力にふれることによって、21世紀を謙虚に迎えたいものだと思う。